【資料紹介】

実践女子大学美学美術史学科所蔵「源氏物語図草稿」

仲町啓子、岩佐悠里（院2年）、大平有希野（院2年）、
太田佳鈴（院1年）、藤生明日美（院1年）

資料的意義

本作品は[1]、天地十四糎ほどの画面に、墨線のみで簡略に源氏物語図を描き出し、雲形等の部分に場面を説明する書き入れを、また図中に図柄の細部に関する指示を添えている。その体裁から察するに草稿本の類と思われるが、しかしながら、左記のような特色を有している点において貴重であり、ここに紹介する所以である。

(1) 山本春正（一六一〇－一六八二）が編集したと言われる絵入版本の『源氏物語』（通称『絵入源氏物語』慶安三年〔一六五〇〕跋）[2]と同じ場面を絵画化し、しかもまったく同構図であること。同書は五四巻に二二六図もの挿図（源氏物語絵）を有し、江戸時代初期における源氏物語絵の場面選択と構図の問題を考察する上での貴重な資料となっているが、その挿図の系譜や成り立ちについては不明な点も多く、この草稿がその謎を解く一助となる可能性がある。

(2) 細部の描写を詳細に比較すると、(1)の事実にも関わらす、『絵入源氏物語』の挿図からの転写とは思われないこと。掲載した拡大図と同じ場面を描く『絵入源氏物語』の挿図とを比較していただければわかるように、この作品には『絵入源氏物語』の挿図に見られる写し崩れや描写の拙さはなく、各図はかなり的確な筆致で描かれている。そのような描写の巧拙を考慮するなら、この草稿は『絵入源氏物語』の写しとは思われない。つまり、本作品に原本となったものがあるとするなら、それは『絵入源氏物語』ではあり得ない。

(3) 画中には多くの書き入れ（特に人物の比定）があること。『絵入源氏物語』にはそのような書き入れはなく、それだけでも重要な情報を提供している。

現状と問題点

本作品は、薄手の紙に墨で絵と文字を書き入れ、一部に朱筆を入れた草稿本である。画面の天地がおよそ十四糎で、現在三巻の巻物に仕立てられている。各巻の長さと紙数、及び収録する帖は左記の通りである。作者や伝来などに関する付属資料はない。

	帖	紙数	全長
一巻	桐壺～澪標	二〇紙	七六〇・九ｃｍ
二巻	蓬生～夕霧	二一紙	八二四・三ｃｍ
三巻	御法～手習一	十八紙	六七一・四ｃｍ

本紙にはほぼ等間隔の折り目跡や、左右対称の虫食いやシミがあることから、現状の巻子装となる以前、一時期折本風にたたまれて保存されていた時期が存在したらしい。ただし、各紙毎に記載されている整理番号には、折本の状態、巻子の状態のどちらにも当てはまらない不規則な部分が数箇所認められ、当初の形式についてはさらに検討の余地がある。第三巻末尾には損傷が見られ、第十八紙はわずかに「手習」の第一場面のみを残し、それ以降の「手習」の第二場面から最終帖「夢浮橋」までは欠落している。各巻はそれぞれ二〇紙前後で構成され、一紙には通常四場面を描くが、一部二場面分の紙面をさいて描いた図を交える場合は、一紙三場面となる。

各帖の場面には絵のほかに、その場面を説明する文章または語句の書き入れがある。最初の「桐壺」では、絵を避けるようにして簡潔な内容を書くのに対して、巻を経るに随いしだいに情報量も増えて細かな内容を書き込むばかりでなく、書き方も大胆となり時には絵の上にもかかることもある。こうした書き入れ方の密度の変化は、書き入れが別の原本を単純に写したものではなく、順次試行錯誤的に（いわばオリジナルに）書き加えられたことを示唆している。内容的には、『源氏物語』本文の引用のほか、『絵入源氏物語』あるいは『源氏物語湖月抄』などの注釈書の抜粋、そして書き入れ者自身が独自に書いたと推定されるメモ（日付などの記入に多い）の大きく三種が存在している。特に絵の説明に注釈書を適宜参照している点が、この「源氏物語図草稿」の制作目的や用途を考える上で興味深い点である。[3]

実践本の絵の部分はそれとわかる程度に省略・単純化され、暗示的に表されることも多いため、一見すると実践本は、絵師が本制作のために参考とする下書き（あるいは手控え）として制作・使用していたもののようにも見える。しかし、絵に直接関係した書き入れ（たとえば「シトミ」などの指示）は絵師の作画のための書き入れと解されるが、物語本文や注釈書の抜粋は直接作画につながるものではなく、絵師の草稿の類にこのような詳しい書き入れが加えられた例を知らない。果たしてこの部分が絵師の筆になるものか、第三者なのか、朱筆の筆者も含めて問題となろう。筆者問題に加えて、書き入れの時期（絵と同時期か否か）も検討すべき課題である。現時点での予想としては、実践本は絵師の草稿的な用途を有しつつも、その書き入れには何らかの知識人が関与し、詳細な源氏物語絵の解読を試みたものではないかと推測したい。

すでに述べたように絵の部分は、山本春正の『絵入源氏物語』の挿図ときわめて密接な関係にある。同一の場面選択、場面数であることに加え、構図及び人物のおよその図柄も同じである。ただし描写力という点では実践本の方が画面に構成力があり、人物のプロポーション等も的確である。『絵入源氏物語』に見られる人物描写の不整合や空間描写のつたなさは実践本にはなく、安定した専門的な絵師の技量を披露している。たとえば有名な「夕霧」の帖の秋の小野の山荘の場面では、鹿や刈田などが錯綜する『絵入源氏物語』の画面に対して、実践本にはそのような素人的な拙さは見られず、空間描写が合理的に整えられている。「浮舟」では舟の安定した俯瞰視が見られるのは実践本のほうである。人物像が横広になりがちな『絵入源氏物語』に対して、実践本の人物像は全体に引き締まり、構造的にも的確に描写されている。

実践本の絵師を推定するにはさらに画面の詳細な比較検討が必要となるが、一点だけ構図的な特徴を指摘するなら、江戸時代の土佐派が常套的に使う吹抜屋台の構図（長押や鴨居を「く」の字形に用いた構図。土佐光則の色紙などには頻繁に登場する）は少なく[4]、しかも全般的に「若菜上」の場面七に見られるように、簀子縁や長押などの角度は『絵入源氏物語』に比べて穏やかに（より水平に近く）なり、全般的に水平線を基調とした安定感のある構図を好む傾向にある。これは絵師の属していた画派の基本的な構図感覚の問題と思われ、この絵師が江戸時代の土佐正系の絵師（たとえば光則など）とは距離を置いていたことを示している。

以下、末尾に全巻の縮小図版を載せるとともに若紫、澪標、蓬生、関屋、若菜上、夕霧、浮舟の七帖については、やや大きめの全図を掲載し、そこに書き込まれた文字を公刊した。さらに、絵画化の頻度の高い場面を選んで『絵入源氏物語』の同場面と並べて比較の便に供した。将来的には全体の研究を目指すが、一部分の特色を示すのみにおいても、本作品の資料的な価値は充分に伝えられるものと考える。

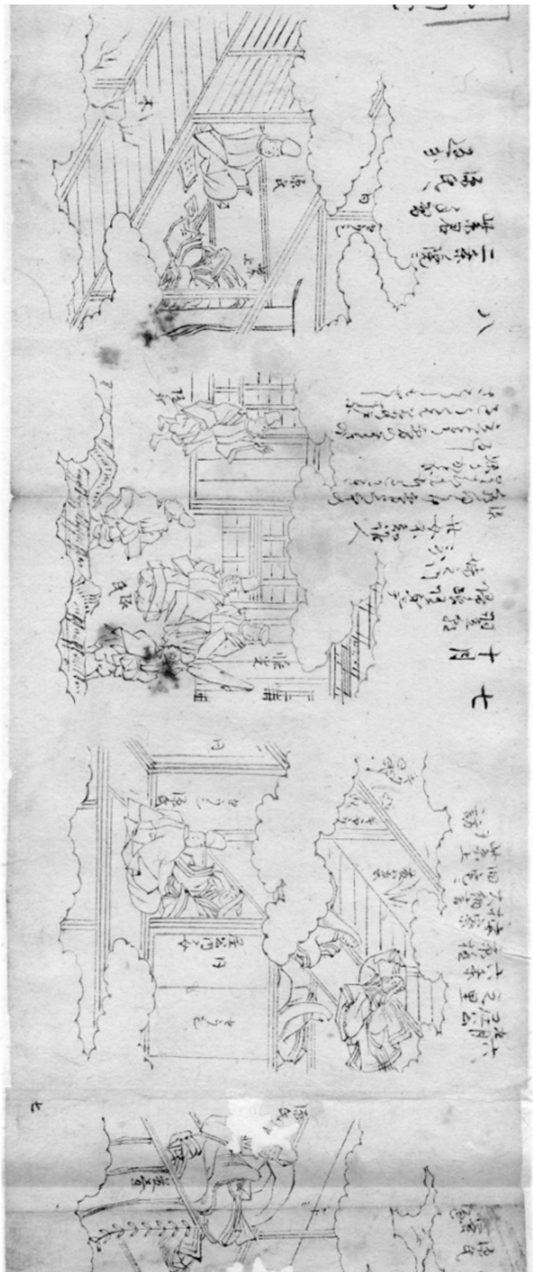
1　これは、かつて実践女子大学に在職された宮次男教授が見出された資料である。今回の紹介は、大学院美術史学専攻の平成二十年度前期の仲町ゼミで重ねてきた研究会の成果である。なお各帖の担当は、若紫（藤生）、澪標・蓬生・関屋（以上を太田）、若菜上（仲町）、夕霧（大平）、浮舟（岩佐）である。

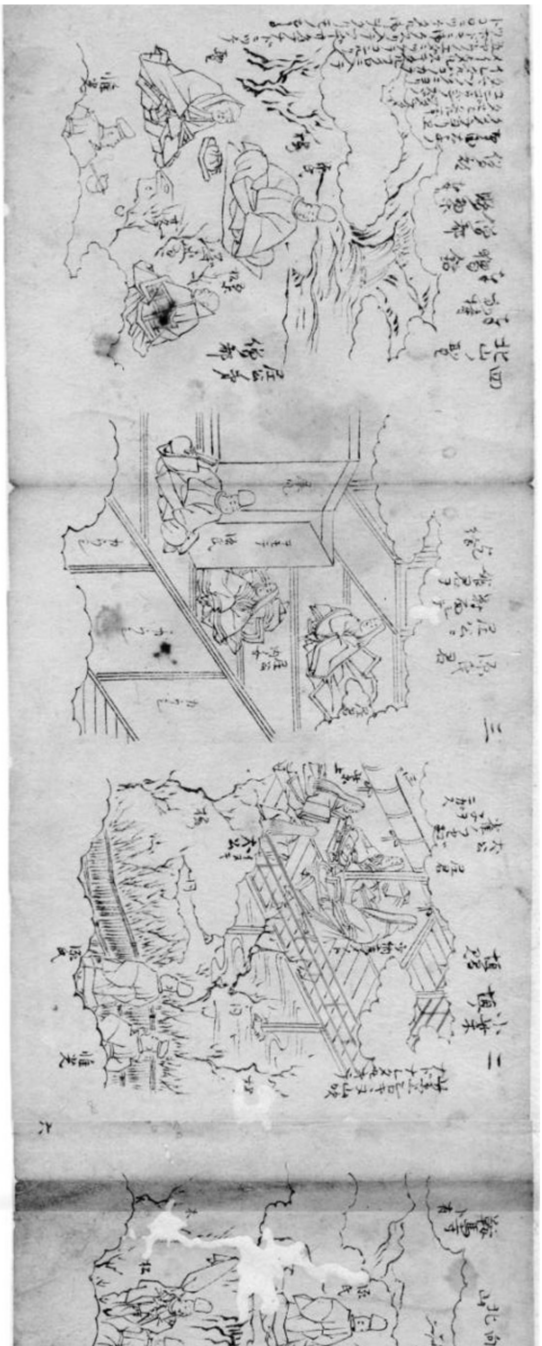
2　吉田幸一『日本書誌学大系53　繪入本源氏物語考』（青裳堂書店、一九八七年）

3　一例として「若菜上」の「二」に出てくる「栢梁殿」の語や「泔器」を説明する「ビンダライノルイ也」や「臺フタ有」などは『湖月抄』が引用する『哢花抄』などに由来している。

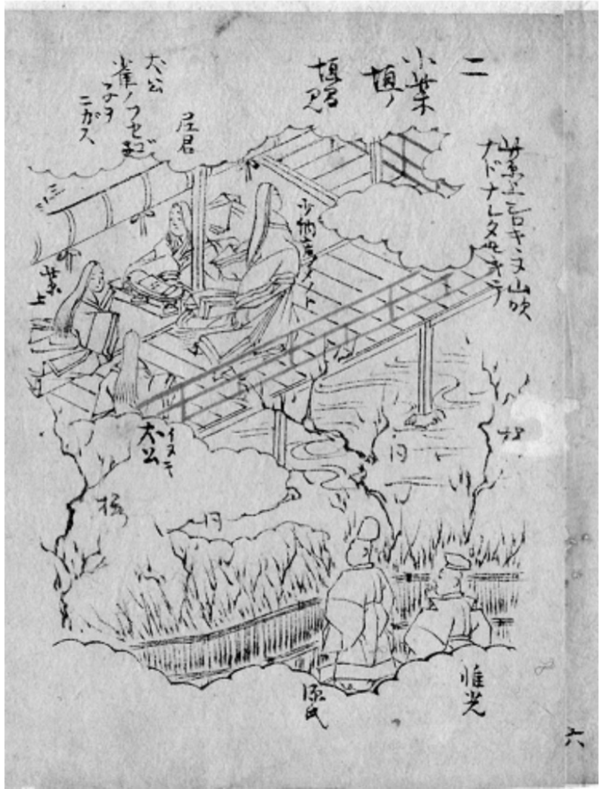
4　皆無ではない。たとえば若菜上の場面五など。

全巻のカラー写真は、実践女子大学文学部美学美術史学科のホームページにて、近日公開する予定にしている。





若紫



『絵入源氏物語』
承応3年版

一 若紫
源氏／瘧病（ワラハヤミ）／三月
卅日／為／加持／向／北山／鞍馬
寺／ト有

二 小柴／垣ノ／垣間／見
犬公／雀ノ／子ヲ／ニガス
紫上シロキヽヌ山吹／ナドナレタ
ルヲキテ

三 源氏君／尼公ニ／對面シテ／姫君
ヲ／乞給

四 北山ノ聖／奉／加持／奉／独鈷／
僧都／贈物等／奉ル
僧都／聖徳太子ノ／クタラヨリヱ
ン／タマエタル一本／フタラク／コ
ンゴウジノズヾノ／タマソノクニ
ヨリ／イレタルハコノカラ／メイ
タルスキタルフクロニ入テ／五ヤ
ウノエダニツケテコンルリノ／ツ
ボドモニ御クスリ入テフヂサクラ
ナドニツケ／トコロニツケタル御
ヲクリモノ奉る

五 六月／藤／壺ノ／宮／源氏／密／
通

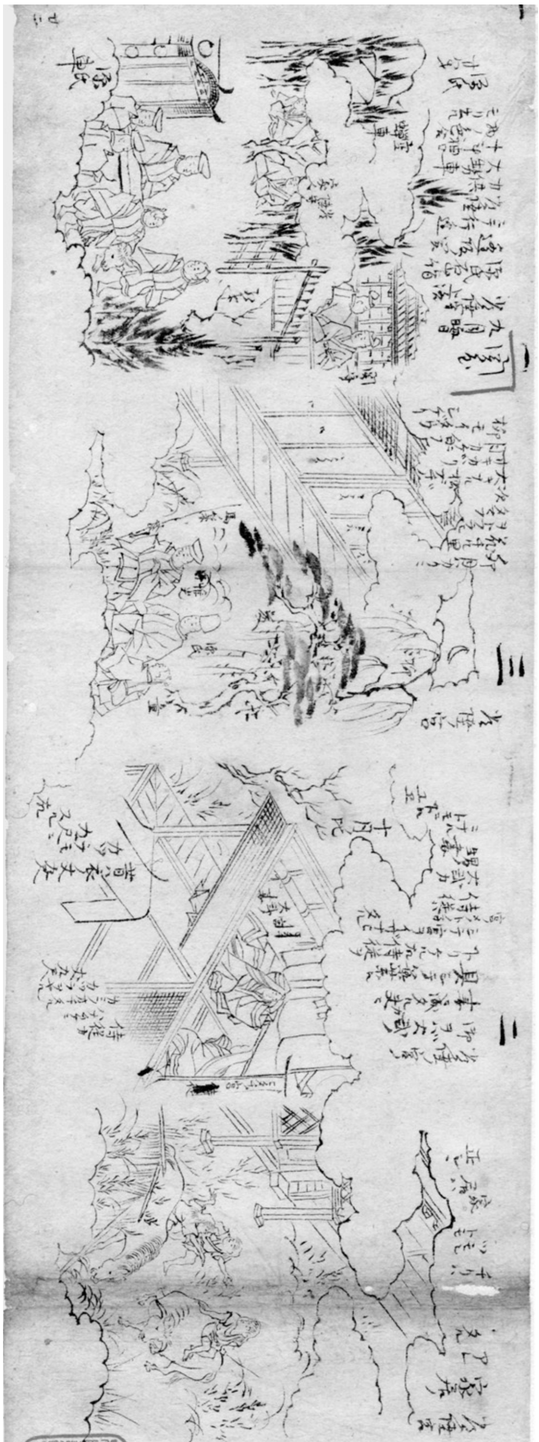
六 九月／尼公／之里／六条／京極／
按察／大納言／旧宅ニ／紫上／ヲ
訪

七 十月／翌朝／帰路随身シテ／妹之
門／歌／此女不誰人／源
朝ぼらけ霧たつそらの／まよひに
も行過かたき／妹かかと哉
返し

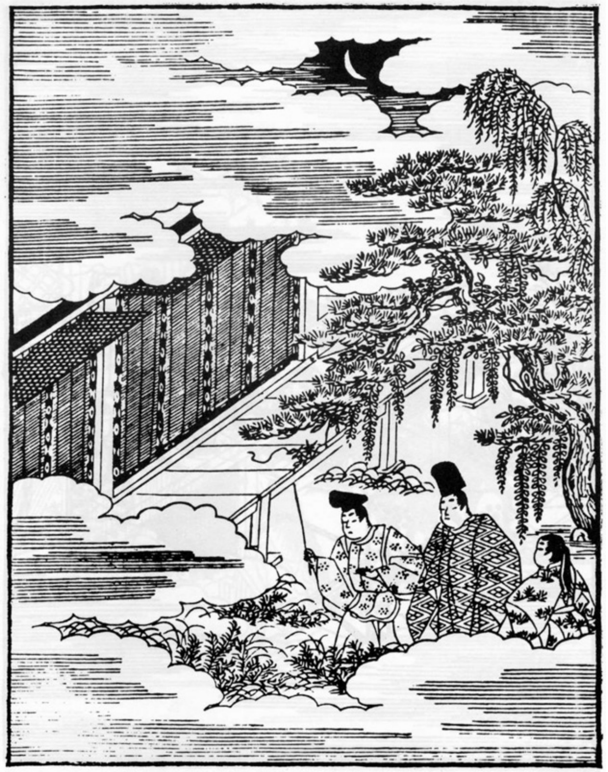
八 立ちとまり霧のまかきの／過うく
は草の戸さしに／さはりしもせし
二条ノ院ニ／紫君／手習／源氏へ
／返歌

注釈　一本／フタラク…クタラをさした
として書かれたものか

澪標



蓬生・関屋



『絵入源氏物語』
承応3年版

七／澪標／一／源氏廿八才十一月迄／三月一日／使ヲ明石ノ上ニ遣ス／十六日／明石姫君出生

二／五月雨ノ比／源氏君／花散里ノ方へ渡リ／給満月有ベシ

三／源氏君／住吉詣／此時ノ明石ノ上／住吉ニ詣テ／源氏ヲ見／奉ル左近将監／尉ヲ兼ル／童随身十人ヲ／給／若君騎馬ニテ／供奉八才

河原左大臣／ノ例ニテ／ワラハズイジン／ヲ給／ビンヅラミヅラユヒテ／ムラサキスソ／ゴノモトユヒ／ナマメカシク／十人／タキリ／若君八才／殿ス／ハラハニテ／同ジスカタノ／馬ゾヒワラハ

上達部／殿上人／我モ〳〵ト／供奉シ／給ウ

明石ノ上ノ舟／乳母姫君ヲイダキ／尼君女房ナド／ノルヘシ

五位也キノ守弟／右近ノ尉ハ靫負ニナリ／ズイジンクシタル蔵人／良清モオナジスケ／ニテ赤袍ヲキル／ワカヤカナル上達部／殿上人／馬クラナド／カザリテ／此人々ノ／衣クロアカ／キクリチンアヲ

八月／住吉ノ楽人／東游ノ舞人／十人一馬上ニテ／装束ハ青ズリ／ト云物ヲキテ／社頭ニテ求子／ナト舞其ノヽチ／馬場ニテ馬ヲハスル左右ノ近衛ノ官人勅之

四／六条ノ御息所ノ尼／卒去ノ後／前斎宮ノ方エ／源氏ノ君／文ヲ奉ル／料紙ハ青ニビ

一／よもぎう（ふ）／八月野分あらかりし時／常陸宮／家居ノ／アレタル／チリハ／ツモレトモ／家居ハ／正シ候

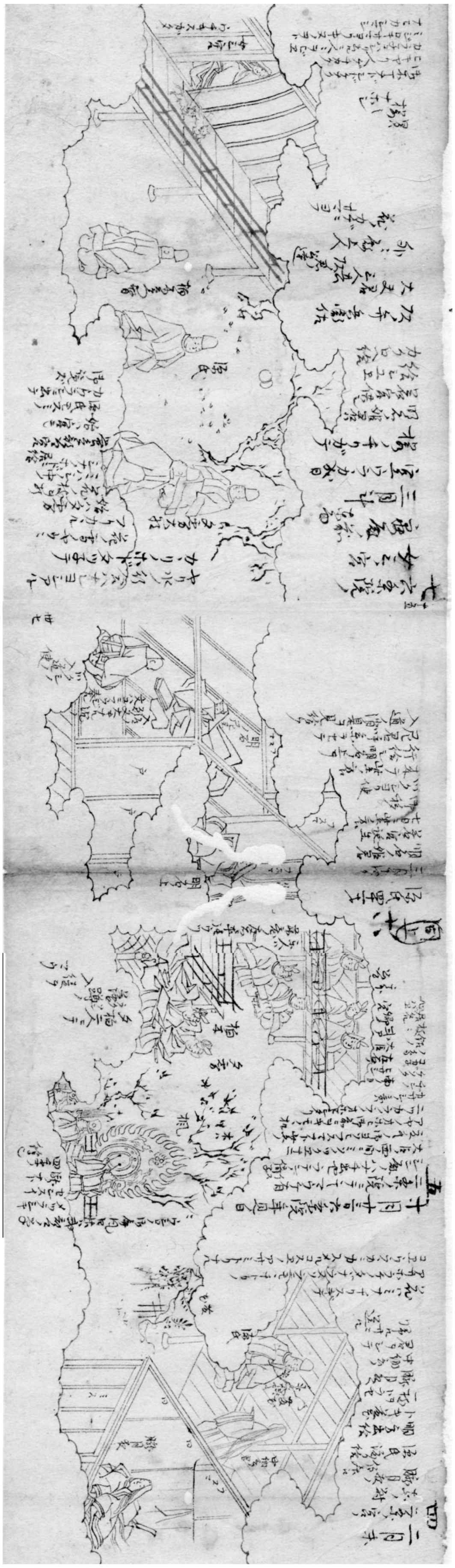
二／常陸ノ宮ノ／御ヲバ大弐ノ妻ニ成タルカ夫ニ／具シテ築紫エ／下リケル故侍従ヲ／シテ宮ヲイザナヒタル／宮ノメノトノ子／侍従ハ／大弐カ甥ノ妻／ニナル／トモニ下ルユエ

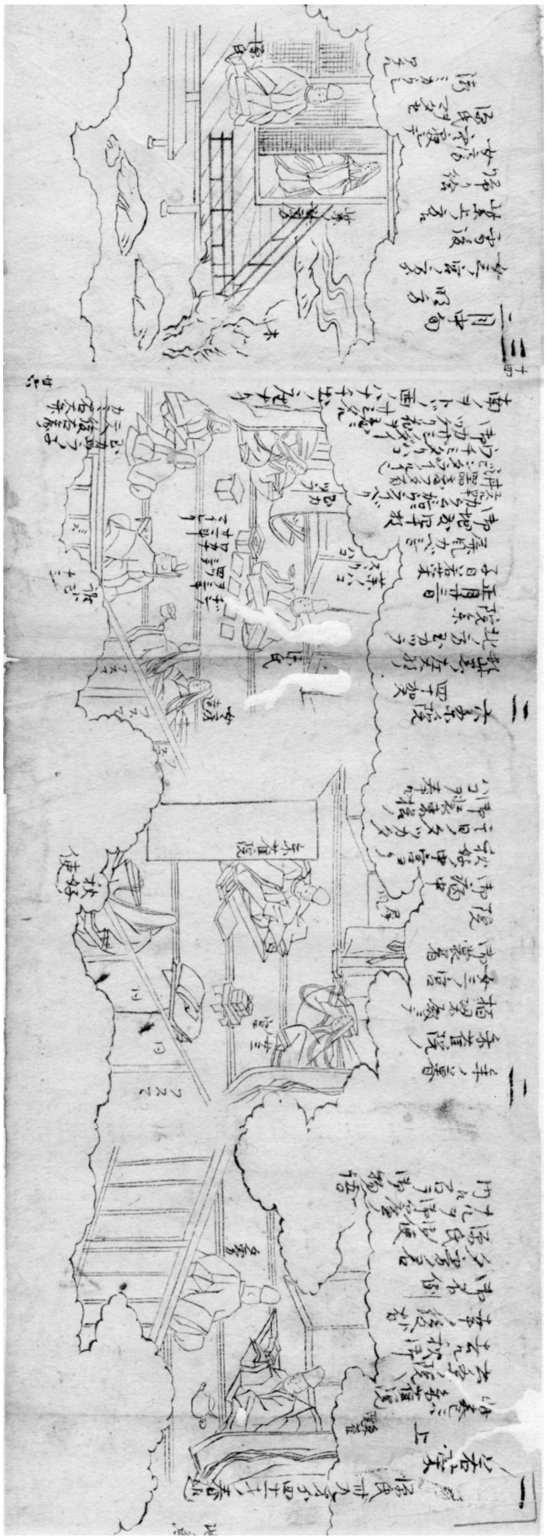
侍従カハナムケニ／カミノオチタル／カツラヲヤル／丈九尺

昔ハ衣ノ丈九尺／カツラモ／九尺ニ／スル故

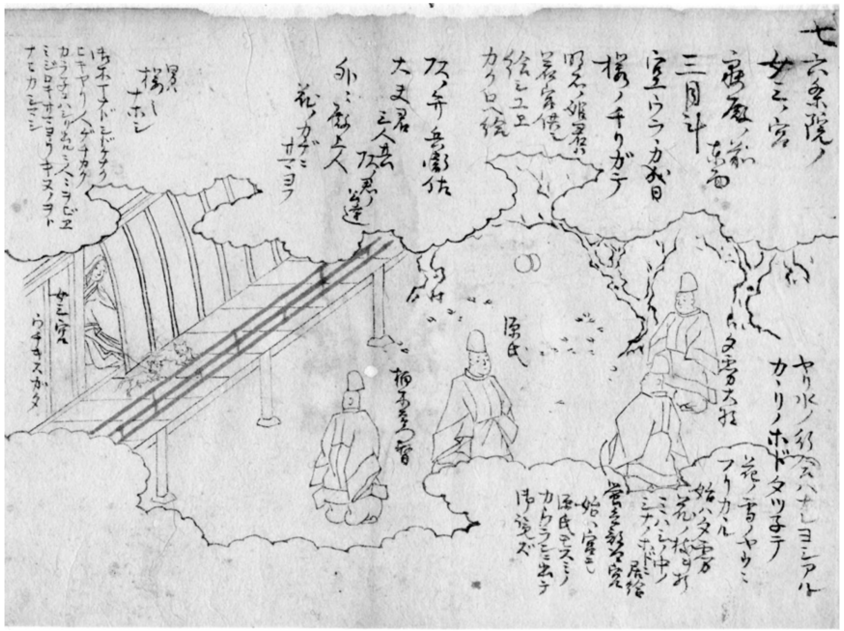
三／常陸ノ宮／卯月ハカリニ／花チル里／ヲトフラヒ／タマフ／次／大キナル松ニフヂノ／サキカヽリ／月カゲニ匂フ／柳モイタウシゲリ

一／関屋／九月晦日／常陸守上洛／源氏石山詣／逢坂ノ関／ニテ行逢／常陸／カ供／大勢車／十斗袖口／物ノ色合／モリ出ル／源氏廿八才





若菜上



『絵入源氏物語』承応3年版

一／源氏三十九才より四十一才ノ春迄／若菜上／此巻ニハ朱雀院／六条ノ院へ／去ル秋御／幸の後ト有／御不例／夕霧ノ君／源氏ノ御使／ナルヲ御簾ノ／内エ召テ御物語

二／年ノ暮／朱雀院ノ／栢梁殿ニテ／女三ノ宮／御裳着／院／御病中／秋好ノ中宮ヨリ／其日ノ夕ツカタ／御装束櫛ノ／ハコヲ奉ル

二／六条ノ／四十賀／髯黒ノ左大将ノ／北ノ方玉カツラ／院参／正月廿三日／子日若菜

屏風カベシロ／御地敷四十枚／カラムシロニカウライベリ／泔器（ユスルツキ）臺フタ有／ビンタライノルイ也／ウチミダリバコ／御カザシノダイ／ツクリ花ヲ臺ニサシタル

南ノヲトヾノ西ノハナチ出ノ座ナリ

ヂンノヲシキ四ツシテワカナサマ斗マイレリ

玉カツラノ子二人後右兵衛ノカミ右大弁

三／二月中旬明方／女三ノ宮ノ方ヨリ／雪後／紫上ノ方エ／帰リ給／女房空寝シテ／源氏ヲマタセ／漸ミカウシアケル

四／二月末／二条ノ宮ノ／東ノ對／朧月夜ノ住居エ／源氏渡リ給／明方出給／トキ藤花／一枝ヲトラセ／朧月夜へ／中納言ノ君ヲシテ／帰ルサニ送ル

花ハミナチリスギテ／アサボラケノタヾナラヌソラニモ丶チトリノ／コヱウラ丶カニカスメルコスヱノアサミトリナル

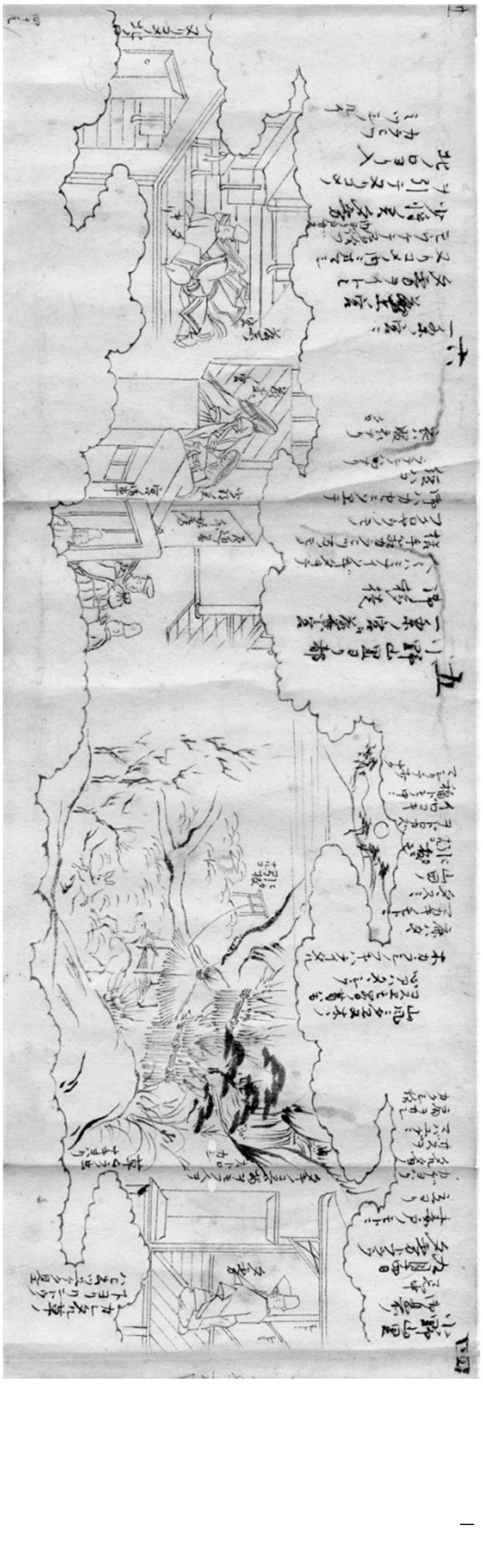
五／十月廿三日六条院年見ノ日／二条ノ院ニテ其マウケ有／シン殿のハナチ出也ラテンノ椅子（イス）／大臣ノ西ノ間ニミソノツクヱ十二／夏冬ノ御ヨソヒフスマナド紫ノ／アヤノオホヒ御前ニヲキモノ丶机／二ツカラノラノオホヒシタリ／カサシノ臺ハ／ヂンノ／ケソク／コガネ／ノ鳥／銀ノ／枝ニ／居タル／心バエ

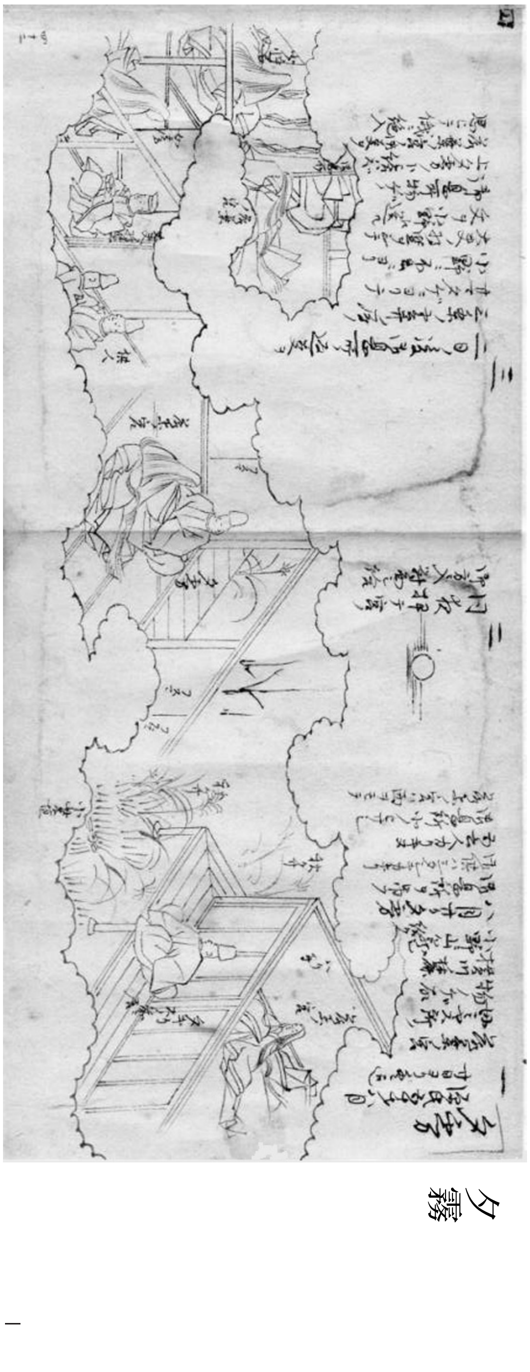
六／源氏四十一才／三月十四日／明石ノ姫君／若宮誕生／七日ニ紫ノ方エ／御移／アカシヨリ使／来テ紫ノ方エ／行給シ明石ノ上ヲ／尼君呼参ラセテ／入道ノ消息ヲ見給ウ

入道ノ願文大キナル沈ノ文ハコニフウジ奉

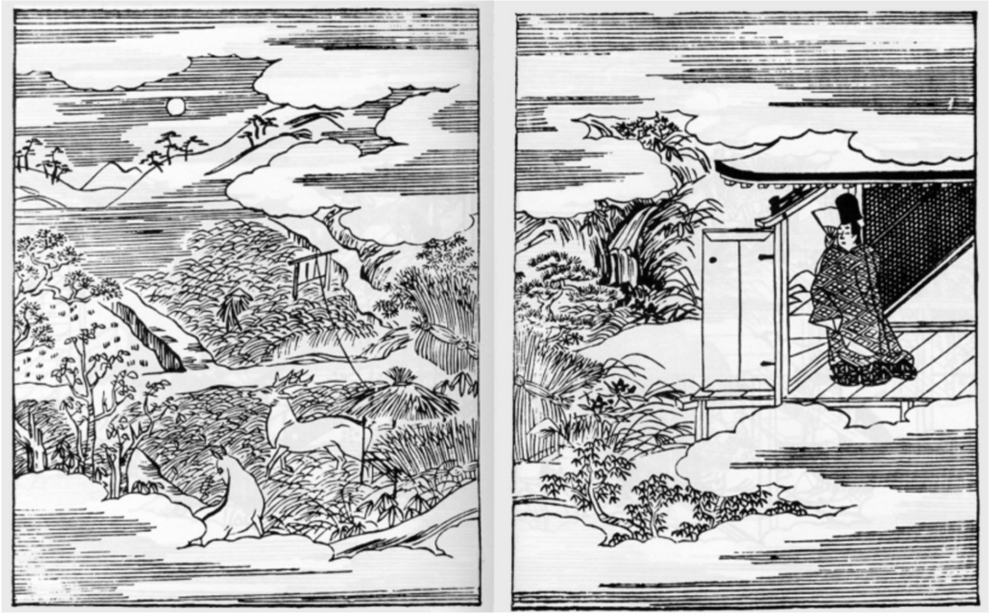
七／六条院ノ／女三ノ宮／寝殿ノ前東面／三月斗／空ウラ丶カ成日／桜ノチリガテ明石ノ姫君ハ／若宮供シ／給シユヱ／カクロへ給

頭ノ弁兵衛佐／大夫君三人共頭ノ君ノ公達／外ニ殿上人／花ノカゲニサマヨフヤリ水ノ行会ハナレヨシアル／カ丶リノホドタツネテ／花ノ雪ノヤウニ／フリカ丶ル／始ハタ霧／花ノ枝ヲ折／ミハシノ中ノシナノホドニ居給／蛍兵部卿宮ハ／始ハ宮モ／源氏モスミノ／カウランニ出テ／御覧ズ／男ハ桜ノナホシ／御木丁ナドシドケナク／ヒキヤリ人ゲチカク／カラネコハシリ出ルニ人〃ヲビヱ／ミジロキサマヨウキヌノヲト／ナとカシマシ



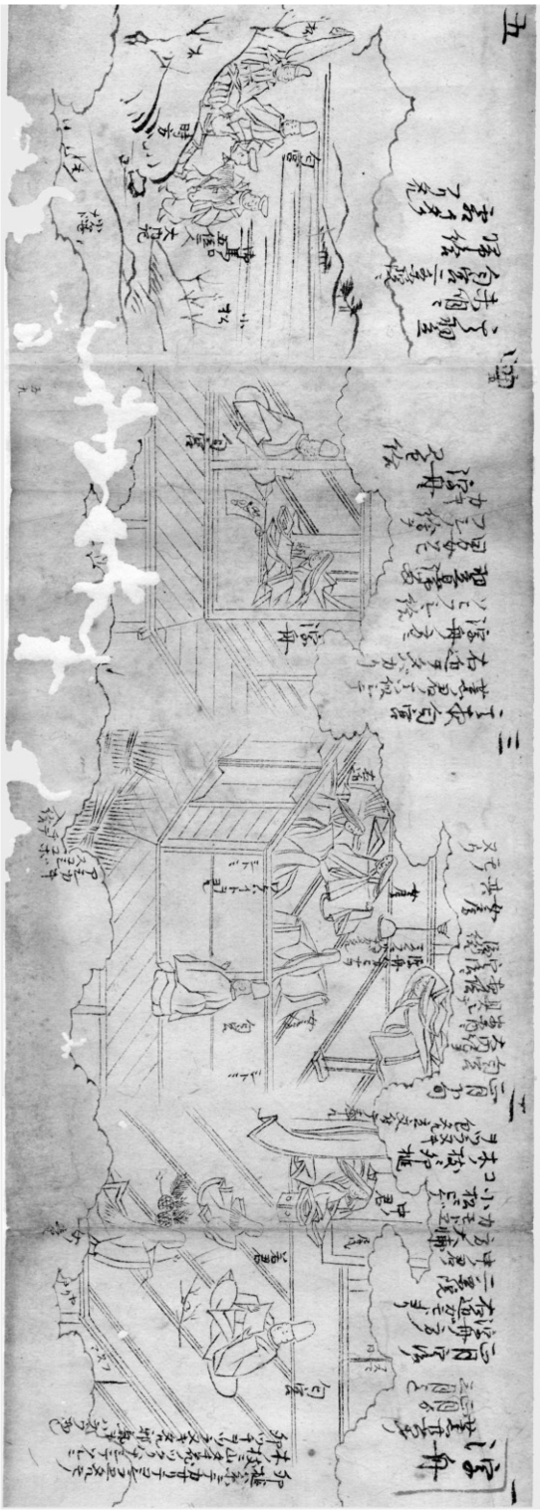


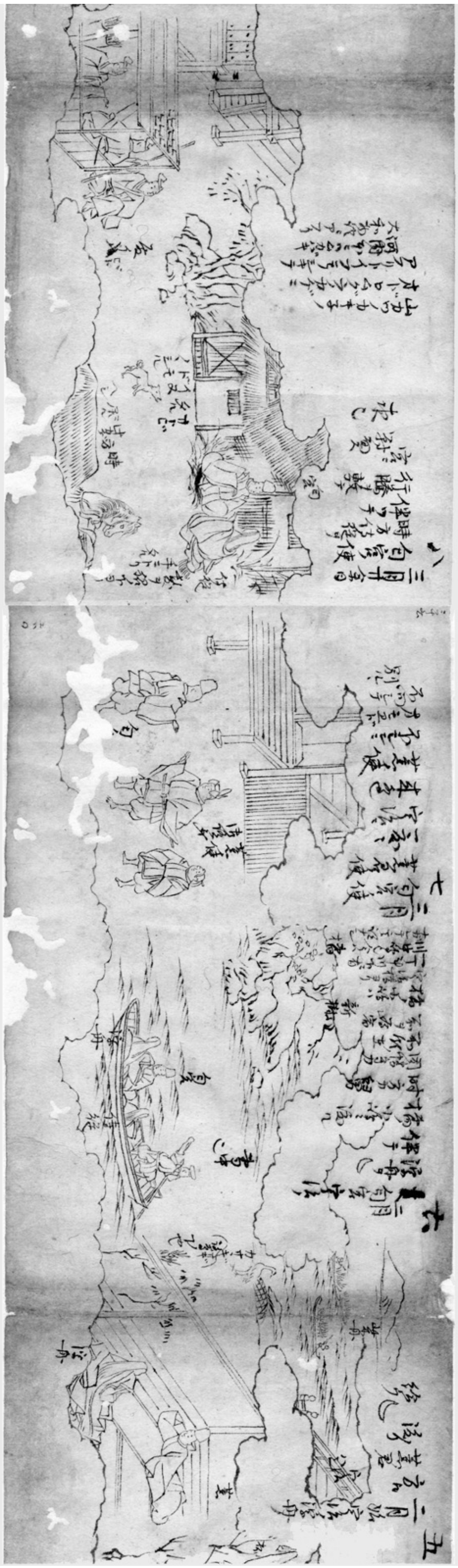
夕霧



『絵入源氏物語』承応3年版

一／夕霧／源氏五十才八月／
廿日ヨリ冬迄
落葉ノ宮／母ミヤス所ノ／物
ノゲ故／横川ノ林斎／小野ニ
山籠シ給ウ／八月廿日夕霧／
御息所ヲ弔フ／御供ハシタシ
キカキリ／五六人カリキヌ／
御息所北ノヒサシ／落葉ノ宮
ハ西ヲモテ
二／同夜押テ宮ノ／御方ニ入
對面シ給
三／二日ノ後御息所ノ返叓ヲ
／三条ノ雲井ノ雁ノ／サマタ
ゲニヨリテ／小野ニ不出ニヨ
リ／大夫ノ将監ヲシテ／文ヲ
小野エ送ル／御息所物ノゲノ
／上夕霧ノトヒ給ハズ／落葉
ノ宮ノ御叓ヲ／思ヒテ俄ニ絶
入
四／小野山里／御息所ノ／忌
中／九月十四日／夕霧トフラ
ウ／妻戸ノモトニ／立ヨリ／
カゲヨハリ／タルタ日ノ／サ
スヲ／マバユゲニ／扇ヲサシ
／カクシ給
カレタル草ノ／下ヨリリント
ウノ／ハヒ出ツユケク見ユ
タキノコヱハ物ヲモフ人ヲ／
オトロ／カシ
草ムラノ虫／ナキヨハリ
山風ニタヱヌ木ゝノ／コスヱ
モ峯ノ葛ハモ／心アハタゝシ
ウ／木カラシノフキハライタ
ル
鹿ハタゝ／マカキノモトニ／
タゝスミ／山田ノ／引枝〔ヒ
タ／ナルコ〕ニモ／ヲドロカ
ズ／イロコキ／稲ドモノ中ニ
／マシリテ打ナク
五／小野山里ヨリ都／一条ノ
宮エ落葉宮／御移徒
人々ハミナイソギタチテ／櫛
手箱カラヒツ万ノモノ／フク
ロヤウノモノ／御ハカセニソ
ヱテ／経ハコ／ラテンノハコ
ナリ／衣ハ服衣ナリ／クロ
六／一条ノ宮ニ／落葉ノ宮／
夕霧ヲイトヒ／ヌリコメノ内
ニオマシ／モウケテ居給フ／
内ヨリ戸ザス／少将ノ君夕霧
／ヲ引テヌリコメノ／北ノロ
ヨリ入／カラヒツミツシノル
イ





浮舟

『絵入源氏物語』
承応3年版

一／浮舟／薫廿六才ノ
ノ／正月より／三月迄／正月宇治
ノ／浮舟ノ方ノ／右近ガモトヨ
リ／二条院／中ノ君ノ／方ノ大
輔カモトエ／小松ニヒゲ／コ／
木ノ枝ニ卯槌／ヲツラヌキ／包
タル立文付テ奉ル
卯槌ハ糸ニテカサリテコシラエ
タルモノ／
木ノ枝ニ山タチ花ノツクリハナ
シテソレニ／卯ツチヲツラヌキ
タル邪気ヲハラウ物也

二／正月下旬／匂宮／大内記ヲ
ニ／案内ニ／具シテ／夜陰／宇治
ニ／渡リ給
女房／共／モノ／ヌウ
浮舟ハカヒナヲ／マクラニ火ヲ
／ナガメタル
ワラハイトヲ／ヨル
アシカキ／スコシ／コボ／チテ
／入給

三／其夜匂宮／薫ノ君ノ真似シ
テ／右近ヲタバカリ／浮舟ノ方
ニ／ソヒフシ給／翌日滞留／男
女ソヒ／フシノ絵ヲ／カキ／浮
舟ニ／見セ給

四／其翌／未明ニ／匂宮二条院
ニ／帰給／霜イタク／フリタル

五／二月始宇治ノ浮舟ノ／方エ
／薫ノ君／渡リ／給ウ

六／二月／匂宮宇治ノ／浮舟ヲ
／伴テ／橘ノ小嶋ニ渡ル／時方
カ舅／因幡守カ／所領ノ在／所
ヲ為宿
橘ノ小嶋ハ／宇治橋ヨリ／一丁
斗川下ニ有／川中嶋也今ハ／ナ
ガレテ其跡ナシ

七／三月　匂宮ノ使／薫君ノ使
／一度ニ／宇治ニ／来逢／薫ノ
使／不シンニ／オモエド／不問
シテ／別ル、

八／三月廿余日　匂宮ノ使／時
方侍従ヲ／伴ッテ／行騰ヲ敷テ
／宮ニ／対面ス／夜也
山カツノカキネノ／オドロムグ
ラノカゲニ／アフリトイフモノ
シキテ／河内本ニハムカバキ／
大和物語ニアフリ
ル
髪ヲ脇ノ下ヨリ／手ニトリ／タ
時／方／此カゲ／ニ／居ル／ヘ
シ
サトビ／タル／イヌ／ドモ／ノ
ヽシル